

第2特集

気候変動時代の感染症 総合診療医のための新しい臨床地図

これからの感染症診療の新たな座標軸

気候変動は今、私たちの臨床の前提そのものを書き換えつつあることをご存じだろうか。それは感染症の地理的分布や季節性、さらには重症度にもまで影響を及ぼしている。水・食物媒介感染症の変容、ベクター感染症の北上・再興、そして豪雨・洪水・猛暑といった気象災害に伴う感染症リスク——これらはもはや例外ではなく、日常診療のなかで向き合うべき現実となった。従来の知識だけでは捉えきれないこの変化は、人間と地球環境の関係性の変容そのものである。

今、求められているのは「プラネタリーヘルス」という視座から感染症を捉え直し、臨床の現場に新たな意味づけを与えることである。本特集では、総合診療医が最前線で感じ取る“違和感”や“変化の兆し”を手がかりに、環境・社会・個人をつなぐ「新たな座標軸」を提示したい。

目の前の患者の背後に広がる地球規模の変化に想像力を働かせること、それこそがこれからの臨床に求められる姿勢である。日々の診療の一つひとつが、未来の健康を守る実践につながる。本特集が、その確かな一歩を後押しすることを願っている。

編集幹事

山梨勤労者医療協会
武川診療所

太田知明